

運動部活動の未来

私の専門領域は「体育・スポーツ経営学」、その中でも「学校運動部活動」の研究を長年続けてきている。昨今、「ブラック部活動」という言説がネット上をにぎわし、教員の過重労働の問題とともに、「運動部活動のあり方」にスポットが当たっている。

そんな「運動部活動」の問題を授業でも取り上げている。体育大生にとって「運動部活動」はほぼ全員が経験してきたこと、考えるネタはたくさんあるはず。そこで、いつものグループワークを開始。4~5人で1グループとなって、ワイワイガヤガヤ議論を進める。

「なぜ学校で運動部活動が行われているのでしょうか?」「あなたが運動部活動を経験してきた中で、問題だと思うところは何ですか?」「多忙な教員の生活を改善しつつ、生徒のスポーツをする機会を守るためにはどうしたらよいのでしょうか?」

「部活動」って何?という本質論から始まり、問題点を抽出し、改善策を考える。少しずつテーマを変えながら、議論が前に進むようにしていく。どんなテーマでも議論は活発、途中で打ち切るのがもったいないくらい。そして、一通り議論が終わったら各グループからの発表。この時間が貴重なものとなる。だから、いつもこう言っている。「いいか、俺の話がつまらなかつたら聞かなくてもいいけど、仲間の話が一番参考になるからしっかり聞けよ」これは本音。

授業後の感想の中からいくつかを紹介したい。

- ・ グループワークなどで他の人の意見を聞いて、自分にはなかった考え方も知ることができて、アイデアの幅がすごく広がった。
- ・ たくさんの人の意見を聞くことができ、違った意見を持つ人も多かったため、私自身の視野や考え方にも新しいものを見つけることにつながったと思います。
- ・ グループワークを通して、自分の考えのほかにこういう考えもあるんだと気づかされるが多かったので良い時間でした。

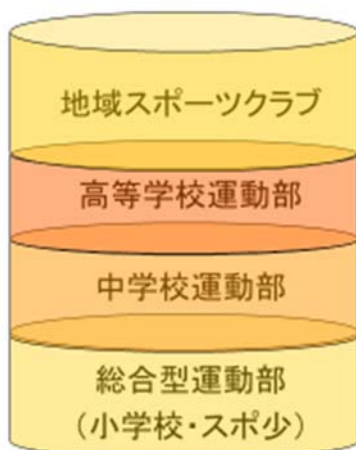
ひたすら勝利や記録を目指して、休みもなく打ち込んできた運動部活動のことを立ち止まってじっくり考える機会にはなっただろう。未来の指導者たちに大いに期待したい。かくして、200人を超える大教室でも、果敢にグループワークに挑戦することになる。

そんな勝利至上主義的な過度の活動を招いている原因を、筆者なりにいくつか考えてみ

た。まず第一に競技会のあり方。負けたら終わりのノックアウト方式のトーナメントでは、常に「勝つ」ことが求められるのだ。次に実質2年半という時間の制約。その中で結果を出さなければならないという焦りが。反対に、最後の大会が終わると「引退」という不思議な現象が。まだまだスポーツを楽しむことはできるはずなのに。三つ目に「プレイ（遊び）」の否定。スポーツは本来「遊び」のはずだが、なぜか日本では競技志向で「道」を究める姿が求められる。

最後に、筆者の考える「望ましい運動部活動の姿」をご紹介して、筆を擱くことにする。

望ましい運動部活動の姿は？



生涯スポーツにつながる活動

- 競技志向でない活動
- 小学校では総合型運動部で多種目を経験
- 中学校ではシーズン制で複数種目を経験
- 試合は地域のリーグ戦でチャンピオンシップでなく
- 競技志向の活動は、週末などに広域的なクラブで